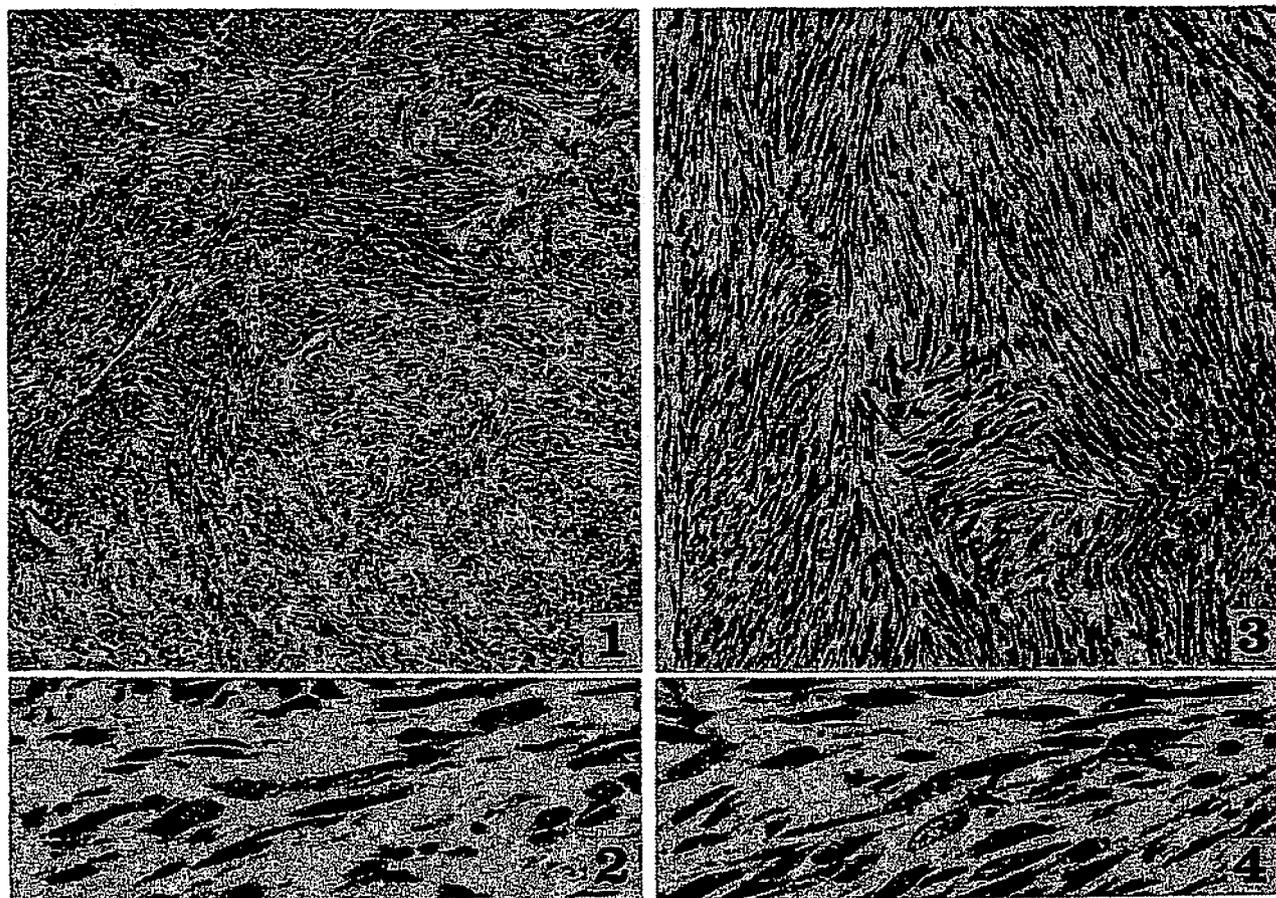


犬の脳と肺の線維肉腫

大阪府立大学農学部家畜病理学教室 第14回獣医病理学研修会標本 No.214



本犬（スピッツ，雌，8才）の主な既往歴は，1973年3月，右後部乳腺に生じたゴムマリ大の腫瘍の切除術を受けたことである（切除組織の病理学的検索は行っていない）。現症は，てんかん様の痙攣と運動失調を主徴とする。即ち1日に1～数回の強直性痙攣発作，動作緩慢，歩様踟躕を示したほか，視覚障害（右眼），さらに時々悲鳴を発し，最後には起立不能に陥り8日間の経過で死亡した（1973年8月8日）。なお胸部X線所見として肺野に散在する結節様の異常陰影像が認められている。以上の所見から本犬は左大脳半球の異常と肺の腫瘍の診断のもとに剖検に付された。

肉眼的所見：中脳・下丘交連を通る左大脳半球前額断（標本A）では，主として外側内回の脳実質に，中心部が出血性軟化を示す充実性の灰白巣（径約1.3cm）を認めた。病巣は周囲脳組織に放射状に広がり，その境界はやや不明瞭である。

肺には，灰白色ないし灰桃色でかなりの硬さを有する十数個の結節（径約0.3～1.5cm大）が全葉に亘って散在していた（標本B）。また左肺門部肺静脈内膜に隆起する同様結節（径1cm）を認めたが，他の諸臓器には同結節は見られなかった。

組織学的所見：大脳病巣は，線維芽細胞様の腫瘍細胞が束をなして種々の方向に錯走している（Fig. 1, ×130）。この細胞は紡錘形で，核は大小不同の楕円形ないし長楕円形を呈し，数個の明瞭な核小体を有する。さら

に多数の核分裂像を認める（Fig. 2, ×1,000）。腫瘍細胞は膠原線維を産生し，さらに嗜銀線維の増生も認める。病巣中心部は著明な好中球の浸潤と出血を伴った軟化巣を形成している。軟化巣に接する部及び病巣周縁部には，多核巨細胞を混じた異型性の強い多数の類円形ないし多形性の細胞を認めた。腫瘍組織の被包化はなく，主として血管周囲性に脳実質に浸潤している。病巣周囲脳組織には，粗鬆化並びに好中球と多数の脂肪顆粒細胞の出現した巣状の軟化を認めた。

肺の病巣は，脳病巣と同じく膠原線維をつくる紡錘形の腫瘍細胞が束を成し縦横に錯走している（Fig. 3, ×330, Fig. 4, ×1,000）。腫瘍組織は肺動脈内で増殖し，大きな病巣では動脈壁を破壊して周囲組織に膨張性に浸潤している。被膜の形成はない。なお肺の他の一部の結節では，軟骨基質や類骨の形成も認めた。

組織学的診断：脳と肺の線維肉腫（肺の腫瘍は，病巣分布，占座部位，病変などから転移性の性格を有している。原発巣は不明であるが，生前に摘出された乳腺部腫瘍に発生母地を求めたい。一方，脳の線維肉腫は原発性か転移性が明らかでないが，肺の腫瘍細胞と類似の形態を示し，さらに肺病巣より新しい病像を呈する。一般に脳の線維肉腫は稀な症例で，さらに転移性のものの報告はほとんどないが，上記のことから本例は転移性線維肉腫の可能性も考えられる）。